

# 人間生活教育学専修における Bb9 の分析

村上 かおり（人間生活教育学講座）

## 要約

広島大学のオンライン学習システムである Bb9 の活用により、学生は継続して自らの思考について振り返ることができたため、その成果が教科全体の学習、専攻別学習というそれぞれの段階に生かされ、最終的なまとめにつながったと思われる。

この授業では毎回学生が授業について振り返り、その記録を広島大学のオンライン学習システムである Bb9 に記録した。このシステムの活用により、学生は自分自身を振り返るだけでなく、授業で討議した他教科を専攻している学生のコメントを読めるため、彼らの思考や発言に至る背景などその意図を知ることができる。

B 段階では各教科の課題と可能性について、各専修の教員が講義をした。学生は毎回、その講義での気づきやグループ協議についてコメントを入力した。

人間生活教育学専修の学生のコメントについて、家庭科の課題の可能性の回を取り上げ、考察したことを次に示す。学生たちは家庭科の課題の回までの講義の中で、理科、数学科、技術科、社会科、国語科の課題と可能性について講義を受けてきた。学生たちは、教科の連携、つながりをどう考えるべきか、その答えをどう見いだしていけばいいのか、思考を巡らし、家庭科の課題の可能性を考えると時間となった。学生たちはそれぞれの教科を学ぶ意義は何か、またそれを生徒自身が見いだせるようにするためにどのように伝えていくかを考え、討議することを通じて、教科の目標について考えていた。しかし目標を達成することへの意識が強くなることによって、学ぶ目的を見失うことに対する危機感もあるということに気づいた人もみられた。家庭科が実習教科であるという一面的なイメージしか伝わっていないこと、副教科という位置づけで認識されていることなど、家庭科について理解を深めている学生にとっては、違和感があったことが書かれていた。他教科専修の学生には、教科の目的が理解されていないと感じたとも書かれていた。これらのことからこのように異なる教科のことを知らない現状に対しては、まずそれぞれの教科について理解をする必要があると感じ、そのためには教員間のコミュニケーションが重要であると感じていた。すなわち教員を志す立場である自分たちが、このような討議を通して教科間の差異や共通性を共有することの有用性を認識したと思われる。またこの授業の受講生には、留学生も多く、教科「家庭科」がない中国の学生のコメントや討議における発言から、家庭科という教科の重要性について再認識した学生もみられた。

C 段階「教育学と心理学による講義」を経て、D 段階では人間生活教育学専修における展開の段階となった。D 段階は鈴木、村上教員が担当したが、第 10 週、第 11 週については、人間生活教育学講座教員の意見を聞くため、各回 2 名の教員が出席した。

以下に D 段階の流れを示す。

第 8 週（6/8）A~C 段階の講義について、7 名の受講生が各々感じたことを述べ、その内

容について自由討議をした。

第9週（6/15）A~C段階の授業を各自が振り返り、そのまとめを発表した。発表内容について、全員で討議した。

第10週（6/22）人間生活教育学講座から横田教員、松原教員に出席してもらい、これまでの授業に基づいて、家庭科の教科観を発表し、二人の教員からコメントをもらった。

第11週（6/29）人間生活教育学講座から今川教員、高田教員に出席してもらい、これまでの授業に基づいて、家庭科の教科観を発表し、二人の教員からコメントをもらった。

第12週（7/6）家庭科の独自性と他教科との連携をテーマとして、それぞれがE段階の発表の構想について考えてきたことを発表した。

第13週（7/13）E段階の発表に向けて、各自が10分の発表を行い、質疑応答を行った。資料はパワーポイントファイル、レジюмеは自由とした。

表1 人間生活教育学専修における検討課題

	テーマ
1	日中比較からみた消費者教育に着目して
2	家庭科の特性からみる他教科との連携の可能性
3	各教科の目標と連携に向けた留意点
4	教科間連携における家庭科の役割
5	今後の家庭科のあり方と授業実践
6	家庭科における課題を解決するための教科間連携
7	家庭科の学習内容と視点の独自性

E段階の発表に向け、家庭科の課題と可能性をテーマにして、各自が発表したテーマを表1に示す。他者の発表を聞き、それぞれの考えの共通点や差異に着目し、家庭科という教科を捉え直す機会となった。また、他教科との関わり方について、E段階の発表で他教科専修の学生にも分かりやすく伝えるため、より具体的な授業のイメージについても検討した。Bb9で継続して考えたことが、このD段階に生かされE段階のまとめにつながったと思われる。

E段階では、7名の院生の協力のもと、家庭科の独自性というテーマで全体発表を行った。本授業は、多様な立場で研究を行う学生が教員とともに家庭科の教科観を問い、教科内容の在り方を議論し検討、相互の考え方の差異を認識する良い機会となった。

最終課題からこの授業を通して得たことをみると、家庭科の独自性や面白さを再認することができたことが書かれていた。10教科について学ぶ学生たちが教科の連携、つながりについて考える過程で、自分の教科の目標を見つめ直し、他教科との差異から独自性について考えることができたと思われる。

以上の結果から、学生たちは各教科の教員の講義から各教科の課題と可能性を考え、その情報からの討議を通して、自己の教科観を整理し、教科教育における自己の研究に対する指針を得ることができた。教科教育学専攻として、他教科の学生と共有する時間が教科の専門性を追究し、自らの教科の教科教育学を考えられたことは有意義な成果としてとらえられると考える。